



CIF JAPAN

NEWSLETTER No.32

<http://cif-japan.papnet.jp/>
cifjapan08@gmail.com

Council of International Fellowship Japan

発行人 NPO 法人 CIF ジャパン事務局長 坂本正路

編集人 同 坂岡隆司 発行日 2014 年 10 月 1 日

事務局 〒607-8216

京都市山科区勸修寺東出町 75 からしだね館

TEL 075-574-2800 Fax 075-574-0025

2014 年度総会のご報告

理事長 竹内和利

去る 5 月 24 日（土）、東京渋谷の救世軍渋谷小隊（教会）において、本年度の定例総会を開催しました。当日の出席者は 8 名、委任状提出者 22 名、議決権行使 1 名、合計 31 名となり、会員総数 46 名の過半数を超え、総会成立が確認されました。以下概要の報告です。

●2013 年度事業報告及び決算報告、監事監査報告の件

事業報告案、決算報告案は、審議の末いずれも可決承認されました。監事監査報告についても承認されました。

●2014 年度事業計画案、予算案の件

事業計画案、予算案ともに原案通り可決承認されました。事業計画案、基本事業である国際研修参加者の募集については、説明会を年 2 回実施することとなりました。

●PEP 実施計画案の件

CIF ジャパン主催の「対人サービス従事者交流研修」(PEP) を 2015 年度をめぐりに実施すること。これに向けた本年度の準備計画案が、予算、プログラム内容とともに竹内理事長より提案されました。審議の結果、実施を目指す方向については出席者全員異議ないものの、問題は予算確保で、とりわけ助成金の獲得が成否のポイントになるとの認識で全員一致しました。結論として、CIF 本部には、資金面に課題を残すことを示しつつ、実施を申請することとなりました。

●任期満了に伴う役員改選の件

2014 年 6 月 30 日任期満了にともなう役員改選については、理事長より、現役員の重任が提案され、出席者全員これを承認しました。



CIF との出会いと オーストリア研修

京都市山科福祉事務所

保健師・精神保健福祉士

佐野富子 (2014 年・オーストリア)



各国からの研修参加者と筆者（左端）

私は、保健師として京都市の保健所に 22 年、また福祉事務所では 8 年間高齢者に関わるケースワーカーとして勤務し、今年で丁度 30 年目を迎えました。長い間の役所勤務の中で、仕事の内容は次第に変容し、現実に目の前の出来事や課題に直面して、先行きの見通しが見えない日々を悶々と送っていましたが、丁度そんな時、たまたま職場で CIF 研修説明会のビラを目にした事がきっかけとなり、説明会に出させて頂き、その場でたいへん刺激をうけ、すぐにでも研修に参加したいと思うようになりました。

説明会でうかがった CIF 研修内容は、ボランティア活動とは異なりましたが、今の私の仕事に対する姿勢や、さらに視野を広めるには、他では見当たらない格好の機会ではないか、又将来、退職後に夢見ているボランティア活動に向けての第一歩となるのではないかと思います。

数ある国の中からオーストリアを選択したのは、日本と多くの点で異なる国である事と研修期間が 2 週間と最も短期間であった為、有休休暇を使いどうにか参加可能ではないかと考えた

結果でした。世間の皆様が思う程、役所の仕事は決して暇ではなく例え有休休暇と言え長期取得は困難なのです。結局、予期しない転勤があった直後でしたが、理解のある上司と同僚の協力の中、気持ちよく参加する事が出来たことを職場の皆様にご感謝しています。

一度も訪れた事がない私のオーストリアについてのイメージは「人々の自立」と「珠玉のヨーロッパ芸術」と言うものでした。すぐに頭に浮かんだことでは、オーストリアの高齢者は、日本のように家族が介護するのではなく、公的サービスを利用しながら自立した生活を営んでおられる人が多い。それにウィーンは「芸術の都」と言われているので、どんなに情緒豊かな生活を過ごしている国民なんだろうか、という思いと期待に胸を膨らませました。

いよいよ出発です。お土産に美しく染め上げられた日本手ぬぐいやガマ口、日本酒と現地でご馳走する為の日本食材・・・と、とんでもなく重たいスーツケースを携えての旅となりました。産まれて初めての海外1人旅で緊張の連続でしたが、何の問題もなくオーストリアに到着する事が出来ました。

研修期間はことしの5月9日から25日まででしたが、研修初日は牧場での1泊2日のプログラムでした。CIF オーストリアのソーシャルワーカー8人と各国からの研修生と交流を深め、グループ意識を強く感じましたが、夜遅くまで延々に続く説明と討論に、現地のソーシャルワーカーの強い期待と意気込みは十分に伝わりましたが、遠く遥々やってきた私としましては、時差ボケの真っ最中で・・・辛い1日となりました。

前半1週間は、7名の研修生（ロシア・トルコ・チェコ・スロベニア・エストニア2人・日本）は美女ぞろいで、揃ってホームレスの家・移民支援施設・ソーシャルワーカー施設等の見学に参加しました。

↓ Social Welfare office for the 19th and 20th district にて



後半1週間は、個人プログラムです。研修参加前に提出し希望した施設等を見学出来るプログラムです。これは、他ではない素晴らしいプログラムだと思いますが、私の保健師としての仕事の内容が分かりづらかったせいか、看護師向けの難病や小児精神病院と医療施設に偏るプログラムが組まれていた事と、利用者と直接的に関わる機会が殆どなかった事が少々残念でしたが、個人プログラムでは質問も納得の行くまで聴く事が出来、難病患者さんとの面談も実現し、一番の充実した内容を経験する事が出来ました。

研修では、特別養護老人ホーム・デイサービス・デイホスピス・病院・専門学校・訪問看護等沢山の施設を見学する事が出来ました。どの介護施設も、室内から屋外の緑を見渡す事が出来、ゆったりしていて快適ともいえる構造である事、食堂がまるでレストランのように素晴らしい空間であり、家族と一緒に食事を楽しむ事が出来る事などに感激しました。ただ、入所者の殆どが、ぼつりと1人で窓側に佇む姿が多く見られ、入所者同士の交流の希薄さを感じました。又、私たち見学者が挨拶をしても返答がありません。素晴らしい施設ではあるものの、寂しい印象を受けました。日本の施設では、どこに行っても円卓で会話を楽しむ高齢者の姿を多く見かけますし、初対面の私が声をかけると、にこやかに反応が返って来ます。ヨーロッパは人の輪より個を重んじるのでしょうか。

これは、是非日本でもそうありたいと強く感じた事ですが、オーストリアで働くソーシャルワーカーは、社会的にその存在をよく知られて居り、ステータスの高い職業のように思われています。研修先で出会ったどのソーシャルワーカーも、仕事に誇りを持ってキラキラと輝くような働く姿が印象的でした。それに引き替え、日本ではソーシャルワーカーの認知度は相対的に低いように思われ、その仕事の内容も市民の目から分かり難いようですから、今後もっと社会的に活躍出来る場を堅固にするべく、ソーシャルワーカーは運動してもよいのではないかと強く感じました。

ところで、オーストリアに行って、まず驚いたのは英語がわかりづらい、と言う事でした。ええ！？本当に英語を話しているの、と耳を疑い、初日からコミュニケーションで苦労しました。これは私の英語力のせいかもしれませんが、例えば、ウィーン市内で道を訊いても親切に教えてもらえませんが、また研修先ではレジュメ

の配布が当然あるものと、高をくくっていました。どこに行ってもレジュメは貰えず、リーフレットだけでもと請求すれば、その内容の表記は全てドイツ語でした。

オーストリアは、移民を多く受け入れ移民のための言語教育支援を実施しており、それらの支援団体には英語や他言語のリーフレットは置いてあったのですが、その他の機関や施設ではドイツ語以外のリーフレットを見る事が出来ず、言葉の壁を強く感じました。



ウィーン市役所前にて

最後に、わずか 18 日間のウィーン滞在ではありましたが、改めて日本と日本人の素晴らしさを強く感じる結果となりました。それは、日本社会ほど、親切でサービス精神旺盛な国はないと言う事です。日本で当たり前と思っている親切が、オーストリアでは全く通用しません。美術館の窓口、お土産屋の店員さん、空港の職員にいたるまで、やや乱暴な対応の仕方に大変わたしは傷つきました。それを証明するかのよう、他国からの研修者の中には 2 人の来日経験者がおられて、彼女らから私が日本人であることを知り、「日本人は、親切で素晴らしい。日本が大好き。」と熱烈なほめ言葉を受け、是非もう一度日本に行ってみたくと話してくださり、内心の嬉しさを隠せませんでした。この素晴らしい日本をもっとアピールする機会を持つ為にも、CIF ジャパンによる交換研修を是非実現し

てほしいと思います。

私は長い保健所勤務の中で、4 年間感染症専任の仕事に携わり、その間 HIV 感染者にも出会い、いろいろ学ばせて頂きましたので、退職後は HIV 支援に関わる仕事をしたいといまはその夢を育んでいます。今回のオーストリア研修に参加させて頂き、国外の人々と接触の機会をもちましたが、今後も一層いろいろな国の人たちと交流を深め、また異文化社会への理解と関心を深めて、退職後の海外シニアボランティアの夢を実現したいと考えております。

おわりに私が CIF オーストリア研修に参加するにあたり、丁寧に指導頂いた CIF ジャパンの竹内様、坂岡様、そして、いつも美味しいお茶をいれて頂いた、からしだね館のスタッフの皆様に、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

CIF 各国支部代表者会議 参加報告 (於：スイス Zurich)

理事長 竹内和利

*この報告は、メール送信可能な会員宛てにはすでに送信済のものです。(若干要約しております)

今夏、スイス Zurich で開かれた CIF 各国支部代表会議のご報告をします。



会議風景

会議は 8 月 2 日から 24 日の午前中にかけて、市内の Triemli 市立病院の一室で開かれました。

出席者は会長はじめ役員 5 名のほかに、各国支部から 21 名の代表または代理出席者の計 26 名。3 日間に及んだ会議は午前 9 時から昼食、午前・午後のコーヒーブレイクを挟んで午後 5 時ごろまで熱心に進められ、多くの議題が取り上げられました。このうち当面、CIF ジャパンとして関心を抱かせられる 2 つの議題だけを中心にご報告致します。



会場の市立病院

< 1 > 2013~14 年実施の PEP についての報告概要 (PEP 担当 CE, Rabia Durak) (報告は 9 カ国のみ)

① CIP 米国が未報告のため概数で 90 名の参加応募があった模様で、このうち 73 名が合格、72 名がプログラム参加を完了した。

② プログラムの期間は、オーストリア、ギリシャ、オランダ、スイスが 2 週間、フランス、イスラエル 3 週間、フィンランド、ノルウェイ 4 週間、米国は期間不定。

③ 直面した困難：(1) 応募者の数が少なく参加者確保が難しい(米国など)。参加者を受け入れる諸団体とくに CIF と意欲的に協働できる団体・組織を必要な数だけ見出すこと(オランダなど)。参加者の希望に見合う適当な受け入れ機関が見つからない(イスラエル、オランダ、オーストリア)。ホストファミリーの引き受け依頼がむづかしい(ノルウェイ、ギリシャ、フィンランド、イスラエル、米国)。参加者の当初の英語力不足、および参加者の背景、経歴などの説明不足によるプログラム構成の困難(オーストリア他)。

④ 財源確保：オーストリアは財源の 20%、スイスは食費のみ政府の支援を受けた。殆どの支部が地元の CIF 会員からの寄付を受けている。イスラエル、オランダ、ギリシャ、フランス、スイス、米国の主な財源は研修参加者の参加費。フィンランドは 80%の財源を民間ソーシャルワーカー協会から、ノルウェイは 53%をオスロ

の大学から、また 34%を SW ユニオンから支援を、オランダはアムステルダム応用科学大学から 1.3%の財政支援をうけている。

⑤ プログラム内容について：大学のソーシャルワーク学部との連携では、オーストリアは地元の大学で学生を交えたイベントを開き、研修参加者にプレゼンテーションを行わせた。この他フィンランド、オランダ、ノルウェイ、スイスの各支部は地元の大学で研修者向けの講義を中心に協力を受けた。プログラムはすべてソーシャルワークに関するもので、招かれた講義の殆どは当該国の社会福祉、社会システムについてであった。

⑥ いずれの支部でも、PEP 及びその参加者は新聞はじめメディアに取材を受け、新聞、雑誌に記事が掲載された。

⑦ 研修者は何を得たか：参加者が個々に感想を述べたと思われるが、それらが包括的に表現されると、どの国でも様に、研修で得た体験、知識、自分の社会との比較による視野拡張、自分の専門分野への 応用課題の発見、ホームステイで知る文化や珍しい食事など、に話題が集まっている。

⑧ 課題

(1) 研修機関に向かう前に十分な予備知識を研修者に与えておくこと、(2) 会員以外から運営財源を見つけること、(3) 研修者についての支部からの推薦状の内容をよりの確にすること、(4) 英語能力のテストを実施する方途の検討、(5) CIF についての事前理解を徹底しておくこと、(6) 医療保険加入を事前に確認しておくこと、等。

この他にも PEP 実施について報告されたいいくつかの項目がありますが省略させていただきます。



BD 会議風景(中央、シリュ・ブッシュ会長 (CIF フランス))

尚、この報告の終わりに、PEP 担当役員、Ms. Rabia Durak さんから、EC 委員会で CIF ジャパンの 2015 年度における、PEP 実施が承認された旨報告があり指名を受けて、プログラム実施の概要と、現在、運営財源を財団に申請中であることを説明しました。BD 会議ではこれについて審議は無く、代わりにプログラム内容や参加費などについて 2、3 の質問を受け、参加者から PEP 開始を歓迎するという意味の拍手を頂きました。

< 2 > 新しい支部の立ち上げと Contact Person の状況 (報告: CP 担当役員、Michael Cronin)

2013～14 年にかけて実施した CP 調査 (支部不在の国の連絡員: コンタクト・パースン) からは、現在 9 名が 活発であるが、あらたに昨年からアゼルバイジャン、パキスタン、台湾からの 3 名が加わった。またブラジルの CP にも再起があった。以下それぞれの国について、現状が報告され、活動する CP は CIP、PEP の参加者 募集、支部の立ち上げに意欲を示している。けれども活動はまだ先の希望という段階のところが多い。スペインでは定款をまとめ、役員構成もできて近く支部立ち上げる見込み。台湾の CP も熱心に CIF、CIP の参加者 を募っており、これには台湾ソーシャルワーカー協会と連携が行われている。2015 年のスウェーデンでの代表者会議には台湾から支部立ち上げの申請が出る見込み。今後も CP とのつながりを絶つことなく、情報提供その他あらゆる支援を行う。①Contact Person Guidelines,

②Establishing New CIF Branch など既存のサポート文書が有用性を保てるよう改訂作業をする。

< 3 > その他の議題

会計報告、会費の納入状況、財務委員会による基金調達の経過などがおこなわれました。前者については 先月にメールで資料をお届けさせて頂いています。とくに中身に触れる審議はなく、ただ支部ごとに会員数と支払われる会費額のずれ、WN の配布数とのちがいなどの指摘がありました。

その他、定款の改定について審議が継続され、他に倫理委員会で検討中の” Ethical Principles” と称される文書の説明と検討が毎度行われています。定款の審議どうよう、これもまだ結論に到らず次回に繰り延べされました。

2015 年の CIF 世界大会は 2015 年 8 月 3～7 日スウェーデンの Sigtuna で開催されることが決定されています。さらに 2017 年度の候補としてギリシャが立候補しています。

今回、CIF スイスが会場を準備されましたが、連日ホテルからバスにのって片道 30 分のところにある、市立病院の会議室が会場でした。日没が遅いので、会議終了後 Zurich 市内の観光を小人数のグループに別れてバスや市電にのって廻りましたが、天候に恵まれ、2 日目の夕方には CIF スイスと地元のソーシャルワーカー協会の共催の夕食会に全員招かれ、スイス音楽と料理を楽しませて頂きました。



主催の CIF スイスの招待による夕食会

C I P プログラム参加から 20 年

理事長 竹内和利
(1994 年、インディアナポリス)

去る 9 月 4 日の朝刊紙上で、大阪湾に浮かぶ「関西国際空港開港 20 年」の記事を見ました。丁度わたしも 20 年前、開港したばかりのこの空港から、今は消えたノースウエスト航空の、これまた先ごろ財政破綻を宣した大都市デトロイトに向けて離陸し、CIP 研修を目指しました。デトロイトで乗り継いでインディアナポリスの空にさしかかった時、この都市の街並みがとても美しく目に入り、これから数ヶ月、眼下の住宅のいずれかにご厄介になることを思いながら、窓に顔をくっつけて幾分興奮していたのを思い出します。



インディアナ大学の学長を表敬訪問。右端筆者。

最初のお宅では、50歳過ぎのわたしを、白髪のご主人と少し年下の夫人が温かく迎えてくださり、それから数ヶ月間、家にいる間はその夫妻とともに、買い物、食事、食器洗い、マックニールによるテレビニュースの視聴、時折の夕食、ブラウン郡の森の小屋での宿泊など、アメリカ生活を体験させて貰いました。その後ご主人は他界されましたが、夫人は娘さんと一度来日され、今でもメールを折々交換しています。互いの家族の近況ばかりでなく、米国や日本の出来事、例えば9.11事件に端を発する米国の中東戦争への介入や、オバマ大統領の登場などの感想も交えたので、日常的にアメリカ事情に関心を深めました。

最初の研修先は地域福祉を学びたいと希望したので、いきなりインディアナ州政府の高齢者・障害者の為の在宅福祉課でした。役所勤めの経験がないので戸惑いましたが、毎日市バスで街の中央にある庁舎に通い、担当係員のデスクで説明に耳を傾けました。そのうち課長さんから、日本の高齢者福祉についてプレゼンテーションを命じられ、持参した資料を参照して、ストーリーを作りました。日本占領下でGHQが行った民生施策が、州政府の役人方にどれほど知られているか興味が有りました。またゴールドプランを終わりに紹介しましたが、日本の高齢者福祉は政府主導で実施されているという印象を強く与えたのではないかと思います。30名ほどの課のスタッフの前でのプレゼンテーションは緊張しましたが、静かに聴いて貰えたのは幸いでした。英語の発表はこれを手始めとして、他に2、3の集まりで発表する機会をえました。また戦後から今日までのわが国の福祉政策の推移をいくらか自習したお蔭で、それ以後、戦後の日本社会の変遷に興味を抱くこととなり、

帰国後もとくに大学に就職してから、今日の社会を理解するうえで戦後史の変遷を学びかつ教えることに興味を深めたように思います。

研修中に知り合った他国の研修生はすべて欧州のひとたちで、今でもそのうちの多くと交流を保っています。これまでチェコ、エストニア、ドイツ、クロアチアで同窓会の機会をもちました。ことしは20周年を記念して南ドイツに集まることになっています。同窓会にはこれまで、CIPの指導者やお世話になった家族も自主参加されました。仲間のCIP参加がどれほど個々に役立ったかは分かりませんが、それぞれ自国の社会でソーシャルワーカー、微生物学者、大学教授、投資企業のCEOなどとなって活躍しています。

あれから20年、この間世界では多くの出来事があり、世界経済、国民生活も変貌を遂げました。ポスト工業社会、グローバル化などの言葉と共に、日本では格差社会と称される状況が出現しています。経済再生への関心が続く一方で、国の前途にも不安がよぎります。「現在の国際秩序や国家群は、第2次世界大戦に起源をもっているのではないか」という歴史社会学者の言葉が耳に残りますが、「もはや戦後ではない」と感じた頃から徐々に辛い過去の出発点が忘却され、国民は寄りかかる基軸が不明のままに未来にさまよい始めているのではないのでしょうか。幼い頃、闇夜に大阪の街が空襲をうけて燃え上がり、京都の西の空が一面真っ赤だった記憶がありますが、そのような小さな原体験をもつ国民も減る一方です。ドイツでは反ユダヤ主義を唱える運動が力を増し、首相がユダヤ人の集いに顔をだしてユダヤ人の保護を訴えています。



オリエンテーション・森での合宿風景

話は移りますが、故オーレンドルフ氏はアメリカの若者に戦後の荒廃したドイツ社会を現地

で体験させようとして、また敗戦国ドイツの若者をアメリカに招かれた、という逸話はよく聞かれます。その体験をもった若者はすでに他界したか高齢期を迎えているはずですが、その体験はどのような結果をその後のそれぞれの人生にもたらしたのでしょうか、そのことを知りたいものだと思います。

これもよく聞かされる「第2次大戦の恐怖を世界の若者に再びあじあわせてはならない」という氏の言葉ですが、この言葉が永遠に残るとしても、時代と共にそのメッセージの新しい受け手の反応は弱くなっていくことでしょう。けれどもオーレンドルフ氏はCIPを創られ、そのCIPに参加した各国の人々は帰国後、自国に支部を立ち上げ、同様の国際交流を始めて、いまも現にその活動はCIFの名の下に続いています。その点でオーレンドルフ氏の言葉は活きているといえるでしょう。

数年前から、CIFの会議に出るごとに、「CIFはPEPである」というフレーズをよく耳にするようになりました。CIFは私たちの過去を回顧する場でもあります。むしろより多く、初めの理想の実現をめざす集団として、その努力をする限り存続の意義を失わないであろうと思います。(2014年敬老の日に)

取り残された地、東北

副理事長 坂本正路

この初夏、東北へ3泊4日の旅をした。仙台で開かれた日本基督教社会福祉学会に出席した後の震災地への初めての旅であった。

女川で（1日目）

女川港の周辺地域はほぼ壊滅状態で、荒涼とした平地が広がっていた。その中にポツンと4階建ての江島共済会館が横倒しになっていた。土台はしっかりとコンクリート柱を打ち込んでいたと思われるが、それが引きちぎられて倒れてしまっていて、津波の威力を物語っていた。

津波の遺構がほとんど片づけられる中で、この建物は是非とも残してもらいたいと感じた。そうしなければ津波の恐ろしさはやがて忘れ去られてしまうように思えたからである。

南三陸町で（2日目）

「津波が来ます。高台に避難して下さい」とい

う言葉を44回防災無線で町民に流した後、津波に呑み込まれて亡くなった遠藤未希さんがマイクを握っていた防災対策庁舎を訪ねた。そこにはワゴン車でやって来た外国人の姿があった。未希さんの事は外国にも伝わっているのだろう。

庁舎の正面には子どもの背丈ほどの2体のお地蔵様があり、その両脇の台には生花や千羽鶴などが所狭しと献げられていた。また何台もの観光バスがそばを通過して行き、この場所が震災の悲しみの教訓を未来に伝えるかけがえのない場所であることを示唆していた。



釜石で（3日目）

この旅で是非泊まりたい宿があった。それが震災復興を伝えるテレビ番組の中で印象に残っていた釜石市根浜（ねばま）の「宝来館（ほうらいかん）」である。この宿は震災後に緊急避難場所として多くの人を泊めていたところであった。空き室が当然あるだろうと当日の昼に予約を入れたところ「満室です」と断られてしまい、本当にがっかりして帰路についた。

ところが帰路途中に立ち寄ったJR遠野駅で大学の同級生に偶然に巡り合い、彼の今夜の予約済みの宿が「宝来館」だったので、急遽同室者として泊めて貰えることになったのである。

翌朝、出発までの時間に女将さんが被災から今までの復興の道のりをスライドで見せて下さった。

そして「東北の復興は遅れています。せめて釜石でオリンピックのサッカーを実施してほしいのです」と言われた言葉が心に深く残った。

オリンピックを東北でも

東京に戻ると、ここではオリンピックの話題で盛り上がっていた。会場のこと。交通手段のこと。インフラ整備のこと等々、沢山の人がオリンピックで浮かれている。一方、復興の遅れている東北の人々は、もう「こちらが先でしょう」とも言えなくなって沈黙してしまっ

いる。

そこで私は提案したい。ワールドカップ・ブラジル大会のように会場を分散しても良いのではないか。

東北各地に競技場や宿舍を作り、交通手段も整備する。そうすれば災害復興と同時に国内外の人が東北を訪れ、被災地にも足を運んで貰える。そのような一石二鳥の名案を考える政治家はいないのだろうか。

NEWS COLUMN

★CIF ドイツのMSW 来日

4月初旬、CIF ドイツのメンバー、Peter Demmer氏(病院のソーシャルワーカー)が来日され、東京、京都のメンバーと交流しました。4月1～4日は、坂本理事により、小田原観光案内。救世軍の病院訪問、見学。同日夕食歓迎会(坂本、浅野、梶村の各氏接待)。そして、関西では、4月9日、竹内理事長が京都観光案内、各病院など訪問見学。また、からしだね館では、坂岡理事が精神障害者の福祉について説明案内しました。(2014年夏号ワールドニュースにDemmerさんの投稿記事が掲載されています)



東京での歓迎夕食会。左から梶村慎吾、浅野純江、Demmer、坂本正路の各氏

★CIF ジャパンの会員仙台に集う

2014年6月20日(金)宮城学院女子大学(仙台市)で開催された日本キリスト教社会福祉学会(第55回大会)に、たまたまCIF ジャパンの会員も何名か参加されていました。せっかくの機会なので、ということで夜の懇親会の合間に、坂本理事の声掛けで集まりました。初めてお目にかかる方もありました。前田大作前会長の奥様(前田ケイ氏)のお名前もありましたが、懇親会ではお目にかかれませんでした。(坂岡)



前列左より江口敏一、坂本正路、岸川洋治。後列左より、秋山智久、岩下よし子、山本誠、坂岡隆司(敬称略)

★国際研修説明会を開催しました。

2014年8月2日(土)、京都・からしだね館において、国際研修説明会を開催しました。参加者は、外部から3名で、CIFからは竹内理事長、坂岡理事、それに本年5月にPEP オーストリアに参加された佐野さん(その後本会入会されました)の3名でした。何とかこの中から参加者が出たらと願っています。

★CIF 講演会並びに PEP 研修報告会予定

日時 2014年11月29日(土)

午後2時～4時半

会場 京都市山科区「からしだね館」

講演Ⅰ：オーストリア交換研修に参加して
(講師：佐野富子氏)

講演Ⅱ：日本の手話、国際手話
～手話の世界から見えてくるもの～(仮題)
(講師：橋本妙子氏)

*詳細は後日お知らせします。

2014年度会費納入・寄付ご協力をお願い

2014年度会費が未納の会員各位には納入をお願いします。(年会費 3000円)

郵便振替口座 番号 00270-4-54121

加入者名 CIF ジャパン

銀行口座 三井住友銀行八王子支店

(店番号 843) (普)7815136

口座名義 CIF ジャパン出納責任者梶村慎吾

《編集後記》

雨の異常に多い夏でした。皆様のところはいかがでしたか?今号は、佐野さんのPEP オーストリア報告と竹内理事長のBD会議出席報告その他盛りだくさんです。ニュースレターに皆様の投稿をお待ちしています。研修参加の思い出、近況、本会に対する意見提言など、何でも結構です。(坂岡)